



作用は想像できる。月の創生が地球と同様に古く、その風化侵蝕の速度が著しくおそいのであろうか。月の内部は地殻の基底層にあたる流動性を示す部分も流動体の核もなく、褶曲運動や大陸乗移もないと考えられているから、創生期の原地形がそのまま今に至っているとみる人もいる。地球上では100万年前の火山形は破壊し尽されてしまっている。その侵蝕速度が月で100倍の時間がかかるとしても1億年(中生代)この方の地形となって、創生期に比すれば新しい時期である。望遠鏡による月面の観測によると発煙現象や発光現象の記録がこれまでに何十例とあり、火山活動の存続を信じている人もある。地球より古い地形が新鮮なままあるとしても、又、真に新鮮な地形があり得るとしても、正しく驚異的なことである。

I.C.B.M.の発達が宇宙ロケットを産み、米・ソの膨大な軍費予算は痛を削る宇宙競走となって、国力の示威が戦争という殺伐な方法におきかわる様な時代である。その副産物をせいぜい味得できるのが、食しい国にいる食しい者の幸福とでも云えるのではなからうか。

(June 10/1965)

お茶大のイメージ

正井 泰夫

僕の生れは文京区小日向台町である。空襲で焼けるまでそこに住んでいた。お茶大のことは直接間接聞き及んでいた。当時はまだ女高師とっていたが、僕のような頭の回転のにがい男にとっては、それが東京女子高等師範学校の略称であることに気づくまで相当の日月を要した。

小日向台町は周囲を商店街でとり囲まれた住宅地であった。女高師は壘町方面の商店街地区に正門があったので、母はそっちの方へ行ってはいけないとよくいていた。また、母は時々「お茶の水を出たオえん」という言葉を使っていたが「オえんとは、一般婦女子の劣等観から生じた「オ猿」という意味の悪口かと思っていた。

中学校は高師村属中(現在の教育大付属中高)であったが、そこで女高師というのは主として女高師村属高女を指していた。僕にとってはほとんど関心外のことであったが、中には毎日のように「女高師」の正門の扉を姿勢・服装を正して歩く友だちもいた。だがそのために斜視になった級友もいたと

か。当時の村属中の校庭にはまだ兵番殿時代の名残りである土盛りした丘がたくさんあったが、その上から見た限り、女高師は常にしんと静まりかえっていた。

それから東高師・東京文理大（現在の東京教育大）へと進み、おそろしく長い学向成就(?)への道が続いた。途中3年ほどアメリカに住んでいたが、他のノ3年間、電車通りの向う側のきたない研究室ではお茶大のことなどにはわき目をふらず勉強していた。時折、うわさにのぼる「お茶大」という言葉も、大学にあるまじき奇妙な名前だと思って聞いていた。その間、この神聖にして優すべからざる学園内に入ったのは、日本地理学会大会の時と、何か事務的な用事で二三度来た時だけであった。いつも、真直ぐ正面を向いて歩いたことを覚えている。地理教室に来たこともあったが、何となく規格が大らかで、飯本先生の体格に合わせて教室を設計したのかと思った。

その後、日本女子大の英文科でアメリカ地理を教えることになり、女子大生とはああいうものかという先入観が着いた。それから立正大学（地理科生はほとんど男子）のさつぱつとした雰囲気でも大学のイメージを新たにしているうちに、お茶大へ非常勤講師で来ることになった。その当時、あちこちで女子大の印象はどうかと聞かれたが、いつもこちらは女子教育のベテランだと答えておいた。その後専任になったわけであるが、一番よろこんだのは家内であった。実は家内は「お茶のみ大学・くい物学科」の古い卒業生なのである。そのような関係で、横個人としても、半分くらいは自分の出た学校で教えているような気がしている。

研究室だより

貝山久子

月日の経過の早さは、年令を重ねるにつれて身にしみて感ぜられますが、それでも365日の間には、この研究室を含めての小さな社会にも、幾多の出来事があり、少しだけさに云えば正史の流れといったものと思わせられます。

地質学担当の吉田兼夫先生は昨夏玄島大学に御転出になりました。僅か2年半でしたが大変熱心に御指導下さり、お名残が惜しまれました。吉田先生の後任は兼任講師としてみえていた正井泰夫先生に決まり、7月に着任されましたが、それに伴い先生方の担任科目にも、研究室にもいくつかの変更が